

もとす教道研会報 第16号 平成26年7月14日

発行所:岐阜もとすモラロジー事務所
Tel/Fax 058-324-7756

総会・講演会を開きました!

平成26年6月21日(土)10時、北方町立北方西小学校ひまわり教室において、もとす教育者道德研究会総会並びに講演会を開くことができました。平成26年度の実質的な活動のスタートです。

当日は、43名の方がご参加くださいました。過去最多の人数は、講演者の知名度のお蔭と感謝しました。ご多用の中を参加していただきました皆様、誠に有難うございました。

総会の進行を広井副会長、開会あいさつ村山副会長、閉会あいさつ神谷副会長、講演会進行志甫副会長と、4名の副会長が揃い踏み。

北村会計による会務報告等で、無事総会が終了しました。



左から順に広井、村山、神谷、志甫各副会長、北村会計、森山会長

森山会長のあいさつ要旨。「もとす教育者道德研究会(教道研)は、岐阜県教育者研究会を主催しているモラロジー研究所の支援をいただいております。このモラロジー研究所は3つの心を育てることを掲げています。『感謝の心』『思いやりの心』『自立の心』です。ところで、最近の政治は『思いやり』と『自立』が対立するかのような状況です。『あの時こうすればよかった』と後悔することのないような生き方が今こそ求められているのではないのでしょうか…」

また、11月13日(木)全国小学校道德研究会岐阜大会の会場校となる本田小学校を代表して伊藤校長(理事)より力強いごあいさつをいただきました。(右)伊藤校長



平成26年度 もとす教育者道德研究会役員・理事

名誉顧問	所 美千敏	岐阜もとすモラロジー事務所参与
顧問	林 明夫	北方町教育委員長・本巣市教育センター
会長	森山 政紀	北方町立図書館長
副会長	村山 和子	瑞穂市立本田小学校教頭
	志甫 庄司	本巣市立根尾小学校教頭
	広井 直美	北方町立北方西小学校教頭
	神谷 肇	岐阜もとすモラロジー事務所事務局長
書記	吉田 光宏	北方町立北方中学校教諭
会計	北村あずさ	北方町立北方西小学校教諭
監査	大野 美紀	本巣市立本巣中学校教諭
	神原 重典	岐阜もとすモラロジー事務所
理事	伊藤 清美	瑞穂市立本田小学校長
	森 健治	岐阜もとすモラロジー事務所

※今年度、理事枠の本巣市・北方町道德部会顧問は空席

平成26年度 今後の主な活動計画

- 8月11日(月) 第51回岐阜県教育者研究大会岐阜地区羽島会場
13:00 羽島市福祉ふれあい会館
参加申し込みお早めに! (県下4会場)
※8月7日(木) 13:00 大垣市情報工房
※8月19日(火) 13:00 瑞浪市総合文化センター
※8月20日(水) 13:00 美濃加茂市みのかも文化の森
12月21日(日) 役員・理事会 17:30 北方町立図書館
2月21日(土) 実践研究会 10:30 北方西小学校
3月14日(土) 役員・理事会 18:30 北方町立図書館

講演：晩年の作家たち

講演者：柳瀬 直子氏 北方町在住の作家、岐阜県芸術文化奨励賞。
主な著作『凍港』『神の午睡の時』『微笑む街』『季刊作家』編集委員

「私が会った、仄間(ソクワン)した…昭和の文士たちの生きざまとその死」との副題で、同人誌作家として歩まれた体験を語っていただきました。

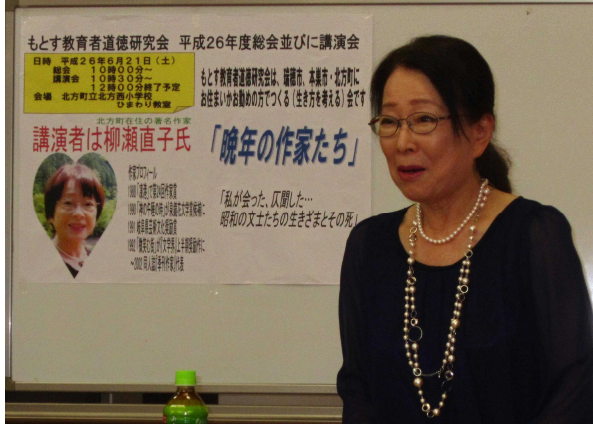
「北方」とのご縁

定年退職した夫・道夫と若宮に住んでいます。

夫は文学仲間であり、創作に関する喧嘩もしますが、彼の博学ぶりを有難く利用させてもらっています。北方町には、今も続いている文芸同人誌『美濃文学』があります。地方ではめずらしいことです。私は、三十代の頃、大好きな作家サガンを真似たトンがった恋愛小説を書いてお世話になりました。

同人誌「作家」との出会い

やがて小説作りのスキルを磨くため、名古屋の小谷剛さんという作家が主宰する『作家』という同人誌の例会に通うようになりました。小谷剛は、戦後最年少の芥川賞受賞者で、「弟子たちに小説を書くためのハウツーやテクニックを教えるが、物書きとしてのスピリットを伝えようとしない」と非難する評論家がいたほど、乾いた感性を説いた人でした。それだけに私には、「小説入園」と名付けられた、小説作法・文章作法を学ぶことで、目から鱗が落ちる体験をしたものです。また、その勉強会では何人かの作家に会えたことも貴重な経験であり、嬉しいことでした。



講演中の柳瀬 直子氏

豊田穰さんの教え

穂積出身の豊田穰さんは、同人誌に書いた『長良川』で直木賞を受賞されましたが、プロ作家となってからもよく同人合評会に顔を出されました。



「恨み、嫉み、僻み、憎しみなどの感情は、ふつう負の感情として退けられるが、物書きを志す人間には宝物の宝庫だよ。しっかり見つけて、書いて書いて書きまくりなさい」のアドバイスは、私に「何を」書くべきかを示唆してくれました。戦争体験としての飢餓感、集団疎開の出来事は、『星の降る音』のデビュー作に繋がりました。

老いを見つめた作家たち

五木寛之氏の『林住期』は、人間の生涯を4つに分けた古代インドの命名からきています。25歳迄「学生期」50歳迄「家住期」75歳迄「林住期」百歳迄「遊行期」。積極的な老いの迎え方を考えています。

耕治人さんは、認知症を患った妻のことを書きました。ボヤを出した妻に福祉課の人が取り付けてくれた警報器が突然鳴り出す『天井から降る哀しい音』。下の世話をする彼に『どんなご縁で』と返す妻。「あなたの旦那さんよ」と教える付添人に『そうかもしれない』と答える妻。悲惨な状態であっても、通い合う老夫婦の愛情。老いに向かう覚悟と生きることへの愛が描かれています。命終三部作をお勧めします。

古山高麗雄さんには、短編集『妻の部屋』という遺作があります。彼が79歳、妻は75歳で亡くなります。「胸が苦しいの」と電話してきた妻の弱々しい声に驚き駆けつけたのですが、間に合わなかったのです。病名心筋梗塞。「明子が死んだ部屋で、明子が死んだ布団を敷いて、私は、家にいるときは、その布団の上に、いささか寝たきり老人のように寝ている。…」「私を嫌ってもいい、もっと生きていてほしかった」と書いています。その妻を亡くした心情に、より多く愛した者の方が幸せなのではないかと、感じる私があります。【構成・森山】